

## 歪曲タクトとしての嘘とアイロニー

## Lying and irony as distorted tact

佐藤方哉

Masaya SATO  
帝京大学文学部

Faculty of Liberal Arts, Teikyo University

## I. 目的

歪曲タクトとしての嘘とアイロニーの類似点と相違点について行動分析学の視点から理論的に分析する。

## II. 分析

正常なタクトは、出来事や事物あるいはその特性が弁別刺激となりそれを記述ないし報告することにより般性好子の出現によって強化される言語オペラントである。これに対し、歪曲タクトとは、記述ないし報告すべき出来事や事物あるいはその特性としての弁別刺激による刺激性制御が歪められているタクトである。

したがって、「嘘」および「アイロニー」は、いずれも歪曲タクトである。

ここでは、嘘を「事実と思っていることに反することを故意に言う言語行動」、アイロニーを「事実と思っていることと反対のことを皮肉をこめて言う言語行動」と定義する。

事実と思っていることに反するあるいは反対のことを言うということは、嘘およびアイロニーは、まず内語として事実と思っていることが正常にタクトされ、それを弁別刺激としたイントラヴァーバルであると考えられる。この過程によって歪曲が生じるわけである。

それでは、なぜ歪曲がなされるのであろうか。それは歪曲された発言が強化されるからである。それでは、どのように強化されるのであろうか。

嘘：大別して3種類の強化があるように思われる。1つ目は、通常的好子出現・嫌子消失・嫌子出現の阻止・好子消失の阻止によるものである。例として、好子出現による強化としては、「お金を掏られてしまった」と嘘をついて聞き手からお金をもらうような場合、嫌子出現の阻止による強化としては、寝坊したのに「交通事故があつて遅れました」と嘘をついて聞き手から非難されるのを避けるような場合がある。2つ目は、聞き手に特定の情動を生じさせることが好子出現となり強化されるというものである。これには、言語的に好子を提示することによりポジティブな情動を生じさせる（わくわくさせる）・言語的に嫌子を除去することによりポジティブな情動を生じさせる（ほっとさせる）・言語的に嫌子を提示することによりネガティブな情動を生じさせる（はらはらさせる）・言語的に好子を除去することによりネガティブな情動を生じさせる（がっかりさせる）、の4ケースがある。例として、ほっとさせることによる強化としては、胃がんの聞き手に「軽い胃潰瘍ですよ」と言うような場合、はらはらさせることによる強化としては、Cをつけるつむりの学生に対し「君はまずDだね」と言うような場合がある。3つ目は、聞き手が、自分あるいは第三者への評価を変えることが好子出現となり強化されるというものである。これには、言語的に自分をポジティブに評価するようにさせる・言語的に自分をネガ

ティブに評価しないようにさせる・言語的に第三者をポジティブに評価するようにさせる・言語的に第三者をネガティブに評価しないようにさせる・言語的に第三者をネガティブに評価するようにさせる・言語的に第三者をポジティブに評価しないようにさせる、の6ケースがある。紙幅の関係で例は割愛する。

アイロニー：アイロニーには、聞き手あるいは聞き手のおかれた事態を皮肉る・第三者あるいは第三者のおかれた事態を皮肉る・自分（自分たち）あるいは自分（自分たち）のおかれた事態を皮肉る、が区別される。聞き手を皮肉る場合は、皮肉を聞いた聞き手にネガティブな情動（不愉快）が生じることが強化出現となり強化される。第三者あるいは自分（自分たち）を皮肉る場合は、皮肉を聞いた聞き手にポジティブな情動（愉快）が生じることが強化出現となり強化される。

## III. 考察

嘘とアイロニーは、いずれも歪曲タクトである点を除いて類似点は乏しいように思われる。

相違点としては、①嘘は、強化されるためには聞き手に歪曲タクト（嘘）であることを悟られてはならないのに対し、アイロニーは、強化されるためには聞き手に歪曲タクト（アイロニー）であることが通じなければならない。②嘘の強化には、もの的な好子出現・嫌子消失によるもの、聞き手の情動喚起によるもの、聞き手の認知変容によるもの、があるのに対し、アイロニーの強化は、聞き手の情動喚起によるもののみである。③嘘の理解および自発に比べ、アイロニーの理解と自発は発達的に遅い。

さきほど、嘘とアイロニーの類似点は乏しいと述べたが、いずれも般性好子の出現によって強化されているのではなく特定の事態によって強化されている。その意味において、嘘とアイロニーはいずれもマンドであるといえよう。

ところで、嘘は聞き手に嘘と悟られないことによって強化されるということは、聞き手にとっては歪曲タクトではなく正常なタクトとして受け止められているのであろうか。

般性強化されるのではない言語オペラントは機能的にはマンドである。そうだとすれば聞き手の情動喚起により強化される言語オペラントもマンドであろう。したがって、単なる胃潰瘍なのに自分では胃癌だと思っている人に「胃潰瘍ですよ」と言ってほっとさせるのはマンドである。しかし、聞き手にとっては「水を下さい」という強化する行動の弁別刺激となるマンドと違って、タクトとして受け止められるであろう。

このようなタクト的マンドも歪曲タクトというのであろうか。嘘とアイロニーを分析することによって、言語行動全般についてのこれまであまり論じられてこなかったさまざまな問題が生まれてくるように思われる。